

子どもの病気

園長 堀田あけみ

大人にとっては病気が流行るといえば冬の風物詩です。インフルエンザに代表される風邪症状は冬に出てくるので、秋が終わるころに予防接種をしないと、と思いますよね。一方、子どもの病気は四季を問いませんが、夏特有のものもいろいろあります。赤ちゃんは胎内でお母さんから抗体をもらいますから、生後6か月くらいまで、病気にかかることは稀です。その有効期限が切れて、自前の抗体を作り出すまでに時間差があるので、一歳半くらいまで、免疫がとても弱くなります。家庭の中で誰かが病気になると、それは家族全員に影響するものですが、小さい子どもであればなおさらで、いきなり非日常が始まってしまいます。子どもの体調不良は、様々な意味で大人のそれとは違うからです。

まず、身体症状のコントロールができず、嘔吐や下痢が出たとき、トイレまで持ちこたえることが難しいというより、あらかじめ持ちこたえてくれません。一度痛い目を見れば、親も枕元に洗面器とタオルくらい準備しますが、最初の一撃は如何とも避けがたいです。私はこれを30秒くらいの時間差で3人にやられたことがあります。

それから、言葉で症状を伝えることができません。言葉が出ている子でも、「痛い」「苦しい」以外の表現は難しい。もちろん「10段階でいうと、どれくらいの痛みですか？」に答えられるわけもなく。「お腹が痛い」だけでなく、お手洗いに行けば治まりそうな痛みなのか、胃の辺りの不快な痛みなのか、脇腹辺りがきりきりするのかで、こちらの心配は随分変わるのですが。自分の幼少時を思い返すと、保健室の先生から「しくしく痛いか、きりきり痛いか、どっち？」と訊かれて、「そもそも、何がしくしくで、何がきりきりなのかわかりませんが」と思った記憶があります。大人になってそれがわかるかというところ…微妙ですね。鋭いというか、強い痛みだと「きりきり」なのかな、くらいで。それでも、「どこが」を示せるだけでも、大人にとっては痛みの解像度が上がります。

更に、子どもは高熱を出しているにもかかわらず、めちゃくちゃ元気なことがあります。ぐったりしているのを見るのは可哀そうですが、39度を超えているのに寝ないで動き回ったり、外に行きたがったりするのも困ります。大人なら、熱があればやすんでいるものなのに。

これらは、大人の視点からの困ったことですが、親にしてみれば一番辛いのは、こんな小さな子が苦しそうにしている、という点に尽きると思います。長く続けば、親の体力の問題も出てきます。夫婦でスイッチできればよいのですが、不可能なケースも多々あります。頼れるルートをしっかり作っておきたいものです。「Help!」を上手に使いましょう。これは「助けて」という重たい意味にとられがちですが、「手伝って」というライトな意味ももっていますから。

家族みんなの健康に気をつけながら、楽しい夏をお過ごしください。